

寮母は宝（2）

私たちの任運荘新入社員平松睦美さんが提出した合格答案文の結びの一節。

—私は福祉職のプロになりたい。常にお年寄りの立場にたち、共感しながらお世話に当たろう。そして同じ考えを持った方がたと共に、この理念を持つこの施設で働こう。福祉を、そして、人間にかかわる全てのことについて学ぼう。誇りをもてる仕事をして、成長していきたい。

さすが定評ある長崎・ウエスレアン大学の新卒。老衰者介護の厳しい職に進んで身を置き、誇りあるわが職となし、そこにわが成長を確信している。二十歳。

しかし、世間は必ずしもこの美しき魂を評価しない。おむつ換えが中心の職だからという理由で。

私たちのある寮母が三十年ぶりの同窓会で、元受け持ちに「寮母」と答えたら、「いかん、いかん、やめたがよい」と言われた。この愚かな老教員、自分の介護も間近いというのに。

今、日本の重大緊急問題が介護保険制度。結局、介護の質と量、人材の確保だ。人間とはおむつに始まり、おむつに終わる唯一の存在だからである。

マザー・テレサが聖女なら、寮母もホームヘルパーも同じ職務。しかし、世間の軽視も無理はない。政府がこの聖職に対し給与上、身分上最低の仕打ちを与えて見本を示しているから。

壮大な奇跡を数々示された釈尊、晩年下痢続きで、おむつの人として死を迎えられた。

終わりよければすべてよし。そのためには唯一よい介護が保障されていなければならない。

(一九九六年五月二十日)